



角川文庫

—3391—

夢の超特急

新幹線汚職事件

梶山季之



角川書店



昭和五十年六月二十日 初版発行

定価は、カバーに
明記してあります

庫 文 川 角

急 特 超 夢
ちようときゆう
ゆめの



著 作 者

梶 山 季 之
やま とし ゆき

出 版 権 者

(株) 季 節 社

発 行 者

角 川 源 義

印 刷 者

柳 健 洙

発 行 所

東京都千代田区富士見二ノ十三
①一〇二 角川書店
電話東京一九五二〇八 株式
会社 角川書店

電話東京(265) 七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Korea 三和印刷・製本
(株) 利 久 商 事 扱
0193—136004-0946(0)

急 特 超 の 夢

新幹線汚職事件

梶 山 季 之

角 川 文 庫

3391

目次

第一章	幸運がやってきた	五
第二章	蒸発したBG	四
第三章	捜査第二課	六
第四章	義足の男	一〇九
第五章	内偵	一四七
第六章	交錯する群像	一八三
第七章	邂逅	二三
第八章	流人の島	二四六
第九章	断末魔	二八二
第十章	垂れこめた空	三三〇
解説		三七

村上 兵衛

第一章 幸運がやってきた

1

……朝から客は、一人あっただけだった。
それも慶応の学生が、権利金や敷金のいらないアパートはないかと、ひやかしに來ただけである。

戦後、東京や横浜の人口がふくれあがったおかげで、横浜市の北に位置する港北区も、けっこう住宅地として注目されるようになった。

渋谷と横浜市を結ぶ東横線、横浜と八王子とを結ぶ横浜線とが、港北区の中を走っているからだ。そして「きくな菊名」は、この横浜線と東横線が交差する地点でもあったのだ。

戦時中は畑だらけだった菊名駅の付近も、近ごろでは、商店街でうずまわってしまっている。これは両隣りの駅である、大倉山にしても、妙蓮寺にみょうれんじしても、おなじことであった。こうした郊外の住宅地は、まず駅の周辺から塗りつぶされていくのである。土地の値段だって、年とともに上昇していた。アパートも、月に一軒ぐらいの割合で建築されている。

だから新築の、室内に炊事場のついたアパートで、権利金も不要なら敷金も取らないという物件なんて、当節考えられない。

佐渡亮次は、そのひやかしにきた慶応の大学生の、愛くるしい顔だちを思いだしながら、いまましそうに舌打ちした。

佐渡は、菊名駅前で、小さな不動産業を営んでいる。間口は一間半もあって、表から見ると広そうに見えるが、奥行は一間あるだけであった。

もつとも、不動産業者は、物件を紙に書いてべたべたとガラス戸にはりつける関係上、間口の広いほうがなにかと便利だった。

開業したのは、昭和二十九年である。

勤めていた会社がつぶれて、なにかつぎの仕事を捜さなければとあせっているとき、菊名で百姓していた妻の伯父おじが死亡し、その一町歩あまりの田畑を、転売してくれないかと依頼されたのが、この道にはいる動機であった。

その妻の伯父の土地は、烏山川からすやまがわに沿った大豆戸町おおまめどにあった。ここに一反、あそこに八畝というような、飛び地ばかりだったが、佐渡が伯父の所有地の近くの農家に、

「買う気はないか——」

と誘いをかけてみると、意外にも二つ返事で相手たちは乗り気になった。

むろん不況のさなかだから、三か年の年賦ならば、という条件つきである。佐渡は年賦支払い

を承諾するかわりに、時価の四割増しの値段を唱えた。

「土地は年々一二パーセントずつ値上がりしている。したがって三年後には、現在の四〇パーセントぐらいは値上がりしているだろう……」

というのが、彼の言い分である。

ここで農家の連中も考えなおし、結局は彼の主張する時価で、現金で買いとってくれた。売買登記をすませたあと、佐渡亮次は、妻の伯父一家に、

「時価の八割ほどでしか売れなかった……」

と嘘を言った。つまり二割ほど、ピンハネしたのである。働き手を失い、借財を背負っていた伯母は、それでも手を合わせて彼を拝み、五万円の手数料を包んでくれた。

へこれはおもしろそうだ……」

佐渡が調べてみると、不動産売買業者としての申請をするだけで、当時は容易に許可がおりる時代だった。東京都では、地面師が跋扈し、業者の資格審査をすべきだという意見も出ているもようだったけれど、神奈川県ではあまりうるさくもない。

しかも菊名駅は、横浜市港北区に属し、東横線・横浜線の交差する地点でもある。

佐渡は、この土地の発展性に着眼し、伯父の田畑を転売して得た利益のなかから、店舗を借り、そして電話を引いた。

——以来、五年あまり、佐渡亮次は、菊名駅前に不動産業の看板を掲げている。

はじめの一、二年は苦しかったが、それは周辺が農地ばかりで、売買の物件に乏しかったからである。

が、東京都の都心の地価の暴騰と、都内の土地不足とは、自然、東横線の陽の当たらなかった地帯にも、都民の目を向けさせた。郊外の土地ブームが始まったのである。

佐渡は、台帳の地目が「山林」となっている土地に狙いをつけ、地主と契約し、信用金庫にわたりをつけて、小規模な「宅地分譲」を行なって、小金をもうけた。

が、他人が先鞭をつけた利潤のある仕事を、見のがしておかないのが世の常である。山林は農地のように、宅地変更にいちいち農業委員会などの許可はいらない。たちまち、東京の業者が乗りだしてきた……。

しかし幸いなことに、土地ブームとともに、アパート、下宿、借家などの賃貸借物件が、年ごとに増加してきて、斡旋手数料だけで確実な収入があるようになった。ひとつには、佐渡が菊名駅前の業者では、古株のほうだったからでもある。

「おや、もう二時近くじゃないか。……ラーメンでも食べよう」

佐渡は、去年から新しく雇った萩野末子に声をかけた。高校を中退して、製菓工場に勤めていたという、十九歳になる大柄な娘である。気の弱そうな、色白の、ぽっちゃりした女だった。

勤めだして一か月目の給料日に、彼は萩野末子を強引に自分の女にしていた。

「きみはおれの秘書のようなんだ……。仕事の秘密も打ちあければ、女房にも話さない金の

やりくり、帳簿のからくりも覚えてもらわねばならん。それには、きみが赤の他人であっては困るんだ……」

という口実で、彼は末子を、他人でない仲にしたのである。

給料のほかに、思わぬ収入があったときなど、靴を買ってやったり、ワンピースを買ってやったりした。そしてその晩は、きまって末子の体を抱いた。

最近は、週に一度ぐらいずつ、新丸子か武蔵小杉の安ホテルで待ちあわせて、交渉をもっている。別に愛しているわけではない。また萩野末子のほうも、それが自分の仕事のうちだというように、淡々とした態度であった。

「ラーメンですか？」

「ああ。二つ頼んでおいで」

「はい」

末子は、ガリ版を切る仕事をやめて、店の外へ出ていった。店の電話代を節約するために、歩いて中華そば屋に行くのである。謄写用紙に、鉄筆を走らせていたのは、彼の会社で一手に委託された、区役所裏の新築アパート物件を、同業者に配布するためであった。

へきょうは、暇らしいな……

月に一度ぐらい、客がさっぱり姿を見せない日があった。そうかと思うと、雨が降っているのに、応接にいとまがない日もあった。

佐渡亮次は、ときどき自分の商売を、蜘蛛くものようだと思ふことがある。粘ねっこい糸の網を張つて、獲物がかかるのを、気ながに待ちかまえているからだつた。

株屋が証券業者、肥くみ人夫が清掃本部員、女中がお手伝いさんと名前を変えた時代になつても、不動産業者だけは、いまだに世間からブローカーだの、千三つ屋だのとなかば輕蔑けいべつされている。それは仕事の性格上、いたしかたのないことなのだつた。もつとも業者のなかには、宅地造成や分譲住宅という積極的な経営に乗りだして大成功を収めた者もある。

佐渡にしたつて、一度は小規模ながら、この菊名で宅地二千坪を造成し、売りだして利益をあげた男だつた。そういう積極経営のほうに、利益の大きいことはわかっている。

しかし、先立つものは資本だつた。それも大銀行などのバック・アップがなければ、どうにもならない。

佐渡の「菊名商事株式会社」は、資本金こそ百万円だが、それは、いわば見せ金で設立した会社だつた。妻や親戚が、重役に名を連ねてはいるが、それも名ばかりの重役で、従業員は萩野末子ただ一人というお寒い会社だつた。したがつて「菊名商事」に、融資してくれる銀行もない。末子が帰つてきて、しばらくすると、ラーメンが届いた。四十円のラーメンだつた。

支那筍ちんそうと、青い海苔のりと、メリケン粉の強い鳴門卷なるとまきがのつているだけの、安っぽい昼食である。

佐渡は、割箸わりばしをとると、前歯でそれをくわえた。そして音を立てて割つた。

「胡椒こしょう、ないかな？」

「はう」

末子は、机のひきだしをあけ、胡椒と調味料の小瓶を取りだした。

末子が、彼のラーメンに胡椒をふりかけ、佐渡が軽くくしゃみをしたときである。

表のガラス戸に人影が立ち、ゆっくり戸があいた。こういう戸のあけ方をするのは、同業者か、売り物件の依頼人だった。△買い△の人間なら、きまって表にたたずんで、はり紙の表示物件をたんねんに読んでから、店の中へはいってくる。

佐渡は、同業者だろうと思い、ラーメンを一口すすってから顔をあげた。そして、

へあ、売りだな！△

と思った。

ちぢれ髪をポマードで、オールバックになでつけた、色の浅黒い四十一、二の客だった。グレイの格子縞の背広を着て、背は一六五センチぐらいであろうか。服装はりっぱだった。

頬骨が少し突きでており、唇の肉が厚いのが気になるが、全体として、バランスのとれた好男子である。

「へい、いらっしゃい」

佐渡は惜しそりにラーメンのどんぶりを眺めて、箸をおいた。だが佐渡亮次も、まさか一か月後に、その男と手を組んで、大がかりな土地買収に乗りだすなどとは、夢にも考えていなかったのである。

「社長さんは、いてはりますか」

——事務机が二つ、電話が一本、あとは応接用のバネの浮いたソファが二つあるだけの不動産会社である。大きい机にすわって、ラーメンをすすっていたら、一目でだれが社長だかわかりそうなものだった。

なのにその客は、わざわざ彼に、念を押すようなきき方をするのだ。言葉も、抑揚も、関西人のそれであった。

「私ですが——」

佐渡は、相手がていねいな口をきくので、にわかに改まって、唇の端を手の甲でぬぐった。

「ああ、そうでっか。私……大阪の中江でっけど——」

大阪の中江と名のられても、一面識もなく、また記憶にない名前だった。名刺を交換してみると、「東亜開発株式会社・社長 なかえ ゆうきち 中江雄吉」とあった。会社の所在地は、大阪市北区の第三梅田ビルである。

佐渡は大阪の地理を知らないから、第三梅田ビルといわれても、その位置の見当もつかなかった。

「どんなご用件でしょう」

佐渡は言った。

「ちょっと土地を買いだいたいと思ひましてん」

中江雄吉は、ビロードのすりきれかかった椅子に、ゆっくり腰をおろした。そして、キングサイズの外国たばこを、ポケットから取りだすのである。

「え、土地を買われるんで？」

予想は、みごとにいくちがつていた。

つぎの瞬間、佐渡のだらしない表情は、ぐっと引きしまった。現金なものである。

「ご希望の値段と、坪数は？」

佐渡は言った。

相手は、彼のその質問には答えず、ゆっくり立ちあがって、壁の大きな地図に見入った。これは佐渡の自慢で、最新の港北区の五千分の一の地図である。

「菊名駅は、ここですか？」

火のついたたばこで、客は鉄道の交差点を示した。

「そうです。こっちが鶴見区、下が神奈川区になりますな」

「ふーん……。大豆戸、篠原、岸根か」

客は、菊名駅周辺の町の名を、三つ四つ拾い読みして、ぼんやりたばこをふかしていたが、ふいにくるりとふり向き、

「この辺に、大きな工場が誘致されるちゅううわさ、聞いたことおますか？」
と言った。

「工場ですか？」

佐渡亮次は首をかしげ、ラーメンを低い音を立ててすすっている萩野末子のほうを見た。

「篠原の改良地区のことじゃないかしら、社長さん」

末子は言った。

佐渡は苦笑し、客に強くかぶりを振った。

「そんな話は、聞いたことがありますなあ。ただ、誘致に失敗した話がありますけどな」
彼は言った。

「ほう？ 失敗したと言やりますと？」

中江雄吉と名のつた紳士は、薄ら笑いをうかべ、またバネの浮いたそまつなソファアのほうに戻った。

「お客さんの言われるのは、たぶん、この篠原町の改良地区の話だと思うんですが……あれは失敗しました」

——佐渡は説明した。

行政区分上では、横浜市港北区に属しているが、鉄道の周辺をのぞいて、港北区は八割までが田畑と山林といってよかった。

篠原土地改良地区というのは、土地の人からは俗に「篠原耕地」と呼ばれている。いわば烏山川に面した低湿地で、農耕地としてはあまり恵まれない田地であった。

このため鶴見川の支流である烏山川の川筋を改修し、水はけをよくして、地質を改良するとともに、耕地整理を行なうべく、農林省の補助を受けながら整理進行中であつたのだ。改良地区と萩野末子が呼んだのは、そのためである。

昭和三十一年を過ぎたところから、菊名駅周辺にも宅地ブームが押しよせはじめた。これは住宅公団が、菊名から三つ手前の日吉に、団地を建設したことに刺激されたのだと見ていい。

低湿地で農耕に従事していた地主たちが、あまり収入もない自分たちの農地を、公団に高く売りわたしたいとひそかに考えはじめたのも、この宅地ブームの影響だった。

五人家族の農家で、現在では一町歩の耕地を持たないと、人並みの生活はできないといわれている。反当たり三石の米作収入があるとしても、一升百二十円で換算するなら、年収三十六万円だった。

だが「篠原耕地」では、反当たり二石がせいぜいなのである。一年の半分を費やして、夏の炎天下を田の草取りで這いまわっても、一町歩を耕作して年収二十万円あまりでは、どうにもならない。

が、これを宅地として売ることができたら、どういうことになるか――。
一町歩は三千坪だから、坪二千元で売ったとして六百万円になる。これを七分三厘七毛の貸付